

日本人のこころ

——生き続ける詩型——

廣田知子

はじめに

昨年度、度重なる海外出張で出席の叶わなかった小野由美子先生に代わり、キルギスの国際研究大会にお招きいただき機会をいただいた。訪問時、青年海外協力隊員の日本語教師としてカラサエフ記念ビシケク人文大学に赴任されていた西條先生は、元鳴門教育大学特命教授小野由美子先生のゼミ生で、かつて筆者がインドネシア赴任中、筆者の派遣先であったハサヌディン大学に教育実習生としてやってきたというご縁もあった。大会概要は以下の通りである。

大会名…日本・キルギス外交関係樹立記念キルギス日本学・日本語教育国際研究大会

日時…二〇一七年八月二十六日(土) 九時～十四時

内容…基調講演・ワークショップ、教育事情・実践報告、研究発表

会場…カラサエフ記念ビシケク人文大学

後援…在キルギス共和国日本国大使館、国際協力機構キルギス共和国事務所

*なお、本大会は「第5回キルギス共和国日本語教育夏季セミナー」も兼ねている。

今大会の参加者は、四十五名で、主要メンバーとしては、日本語教師会(注)会員(ビシケク人文大学、キルギス日本人材開発センター、キルギス国立総合大学、中央アジア・アメリカ大学、キルギス国際大学、キルギス・スラブ大学ほか)と元国際交流基金日本語専門家、大使館職員等である。日本語教師がほとんどであることを考慮して、通訳には頼らず、できるだけわかりやすい日本語で講演することを心掛けた。本稿では、筆者が「日本人の心―生き続ける詩型―」という講演題目で行なった基調講演およびワークショップについて報告したい。口頭で発表したものを文章化するにあたって、講演内容の一部を加筆・修正したことをお断りしておく。

一 基調講演概要

五、七、五、七、七の三十一文字からなる詩型を持つ歌は、「日本文学の流れの中で現代に至るまで断絶しななただ一つのジャ

(全志)

ンル」であり、すでに七世紀の半ば頃から完成したと言われている。日本最古の歌集としては、七七〇年頃に大伴家持によって編集された『万葉集』が挙げられる。当時の天皇から、歌人や庶民までの約四五〇〇首あまりの歌が収められている。平安時代には、天皇の勅命によって編集された歌集である『古今集』、鎌倉時代には『新古今和歌集』が編集されている。その後、戦国・江戸時代を経て明治までその詩型は継承された。明治から戦前にかけては、正岡子規・与謝野晶子などが次々に現れ、作品を残している。そしてその伝統ある詩型は現代短歌に至るまで、ずっと守られ続けてきた。

そうやって一三〇〇年以上も昔から日本人に愛され続けている短詩型文学は、様々な場面をテーマとすることができる。人の死や愛、働く場のこと、病気でさえも歌になる。お祝いの歌や、悲しみと苦しみを唄い込んだもの、旅行詠や自然の歌、はたまた社会的なテーマなど、多岐にわたる。決められたリズムの中でテーマの多様性こそが、長い年月を超えて、詠み続けられる魅力の一つであるとも言えよう。

実際に、短歌という短詩型文学のジャンルを初めて日本語教育の場に取り入れてみようとしたのは、トルコで日本語教育に従事した二〇〇五年～二〇〇七年にかけてであった。その時に学生に作ってもらった作品を紹介しながら、初級短歌における短歌指導の効果と問題点について触れる。

その後二〇〇七年に赴任した中国においても、短歌指導を授業に取り入れた。漢字圏の学生ということで、熟語としての語

彙力がある分、歌としての説得力が増しているのが感じられる。これも実際の作品を味わいながら、解説したい。当然ながら、テーマとして取り上げられている内容にもお国柄が表われている。中国では、学生の間で選歌も行い、好みの短歌に一票を投じてもらった。得票数の多かった短歌を選んで紹介することにする。

現在勤務している日本の鳴門教育大学の学生の作った作品例も紹介する。学生の作った短歌を見直してみると、文法の授業時に与える例文の重要性と同じく、モデルとなる短歌の例は極めて重要で、例を「恋の歌」に限定したことの功罪もあることに気づいた。そこから導き出されるのは、やはり多様性のある短歌を模範として提示することの大切さである。それを踏まえた上で、本講演では時間の許す限り、現代短歌の斬新性や新しい芽が見られる作品の数々を提示したいと考えている。

後半のワークショップにおいては、実作を行う。フレッシュな感覚で作られた多くの短歌作品と出会えることを期待している。

二 基調講演内容

短歌の歴史―概観と代表歌

歴史の話に入る前に、挨拶歌としてキルギスを詠み込んだ歌を紹介する。

はるかなるキルギスの空蒼からむ眼を閉じて風の声聞く

竹安隆代^(注3)

筆者の歌の師の作品を最初に出したのは、遠くキルギスの地に講演に向かう筆者に「はなむけの歌」を送ってくれたからである。キルギスという地名を織り込むことで短歌のことを身近に感じてほしいという願いもあった。

次にNHKのラジオ深夜便で放送された誕生日の花を詠み込んだ短歌を紹介する。本日の花八月二十六日はケイトウである。

台風が過ぎて三日目倒されしケイトウむつくと立つ気配なり
鳥海昭子^(注3)

日本人は四季の変化に敏感で生活の身の回りにある植物や鳥などはよく短歌の題材として取り上げられる。鳥海氏はそれを三六五日に当てはめて誕生日の花の花ことばを添えて一冊の歌集にしている。

まず、短歌の歴史の概略をパワーポイントで提示(次ページ参照)し、説明を行った。パワーポイント資料の○で囲んだ番号は、勅撰二十一代集の順番である。

その後、本大会の参加者は現地の日本語教師の方々が大半であることから、大卒の時代区分の代表歌集の中から具体的な作品を選んで、紹介し一つ一つの歌の音を味わってもらい、解説を加えていった。昔からの流れを簡単につかんでもらうことと、

そこに脈々と流れる日本人の感性を感じてもらうことを目的とした。言葉での説明は最小限にとどめ、音の響きや調べを味わってもらうことを最重要視した。

なお、歌の引用は井上宗雄 武田忠二編(一九九九)『新編和歌の解釈と鑑賞事典』に拠る。この文献の凡例に従い出典を示すため(書名。必要に応じて巻・部立・国歌大観番号)勅撰集は新編国歌大観番号などを明示した。また、引用にあたり、ルビを省略した。本稿では省くが、実際の講演の際の資料は、外国人教師に対する読みやすさを考慮して、すべての歌にひらがな書きを添えた。

一番初めに短歌形式をとっている歴史の古い歌の代表として、次の歌を紹介する。

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を
垣を 須佐之男命
あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る 額田王
〈万葉集・巻一・二〇〉

次に宮中での歌合せのことに触れ、短歌というのが雅やかな伝統の中で貴族たちの教養として守られてきたこと、天皇の勅令により多くの歌集が編纂されてきた時代的な背景を説明する。なぜ『古今和歌集』を編纂したのかという動機をわかりやす

日本文学の発生

歌謡 口承文学

漢字伝来

仏教伝来 (538 ?)

- 700 飛鳥 『古事記』 須佐之男命 (すさのおのみこと)
奈良 『日本書紀』
『万葉集』 (まんようしゅう) 20 巻 約 4500 首 額田王 (ぬかたのおおきみ)

- 800 平安 遣唐使の廃止 (894)

① 『古今和歌集』 (こきんわかしゅう) (905 ?) [勅撰和歌集]

20 巻 約 1100 首 紀友則 (きのともり)

紀貫之 (きのつらゆき)

「歌合」「私歌集」

③ 『拾遺和歌集』 (しゅういわかしゅう) 平兼盛 (たいらのかねもり)

- 1200 鎌倉 ⑧ 『新古今和歌集』 (しんこきんわかしゅう) (1205) 20 巻 約 2000 首
藤原定家 (ふじわらのさだいえ) 西行 (さいぎょう)

- 1300 南北朝

- 1400 室町 ⑫ 『新続古今和歌集』 (しんしよくこきんわかしゅう) (1439)

連歌 (577 + 77)

- 1600 安土桃山

- 1700 江戸 俳諧

『賀茂翁歌集』 賀茂真淵 (かものまぶち)

『桂園一枝』 香川景樹 (かがわかげき)

『はちすの露』 良寛 (りょうかん)

『志濃夫廼舍歌集』 橘曙覧 (たちばなあけみ)

- 1800 明治 短歌革新運動

『竹の里歌』 正岡子規 (まさおかしき)

『紫』 与謝野鉄幹 (よさのてっかん)

『一握の砂』 石川啄木 (いしかわたくぼく)

- 1900 大正

- 1926 昭和 戦後短歌

『山西省』 宮柊二 (みやしゅうじ)

『埃吹く街』 近藤芳美 (こんどうよしみ)

- 1989 平成

くまとめたものとして、「仮名序」と「真名序」の紹介も行った。研究者の中でどちらを正式の序とすべきかということに対する見解などが定まっていらないようだが、ここでは紀貫之作であろうとされる「仮名序」を挙げておく。短歌を詠むことが人生に与える効果ともいったものが明確に示されている文章である。『古今集』が編纂された時代の和歌に対する熱い想いが伝わってくる。講演の際は原文を音読したのち、簡単な解説を加えた。

やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。(『古今集』(主) 仮名序)

いわゆる心の表現が歌であり、この世に存在するすべてのものが歌を詠む。天地、鬼神、男女、武士にいたるまで影響を与えうる歌の素晴らしい効用を強調している。

『古今和歌集』から

桜の花の散るをよめる

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

紀友則

〈古今集・卷二・春歌下・八四〉

古くから桜を詠んだ歌が多いが、散っていく桜を擬人化して詠んでいる。目の前に映像が浮かび上がってきそうな歌であり、「百人一首」にも採用されている。

西行法師、すすめて、百首歌よませ侍りけるに

藤原定家朝臣

見たせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

〈新古今集・卷四・秋歌上・三二六三〉

「三夕の歌」の一首から新古今を代表する歌を選んだ。

花歌中に

願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ

西行法師

〈続古今集・卷十七・雑歌上・一五二七〉

日本人があこがれる美意識が読み込まれている。月と花、しかもその月は満月である。桜の花の下で春に死にたいという願いをもっているのは西行だけではないかもしれない。年齢を重ねるとあと何回花見ができるのかという考えがふとよぎる。日本人の持つ死生観と桜が重なり、満開の桜は華やかではあるが、

そこはかかない不安な哀れを感じさせるものである。

九月十三夜県居にて

秋の世のほがらほがらと天の原照る月かげに雁鳴きわたる

賀茂真淵

〈賀茂翁家集・巻之一・秋歌〉

桜の花を詠み込んだ歌を紹介した後は、月見の宴を詠み込んだ歌を選んだ。純万葉風な歌いぶりであるが、古今・新古今の情緒も伝える魅力的な歌である。雁の連なつて飛んでいく姿をパワーポイントで映し出し、画像とともに味わってもらった。

妹といでて若菜摘みにし岡崎の垣根恋しき春雨ぞふる

香川景樹

〈桂園一枝・冬歌〉

景樹は冬の間は妻のいる本宅とは離れて木屋町で歌を作ったそうである。これはまさに、「仮名序」にあった男女の仲をも睦まじくする歌の力の感じられる歌となっている。

霞立つ長き春日を子どもらと手まりつきつつこの日暮らし
つ 良寛

〈はちすの露・一〇〉

音に関する説明を添えたとすれば、「つ」の音の繰り返しのリズムが楽しい歌である。何気ない日常を素直に詠んだ歌として子供たちと遊ぶ良寛の姿が目にかぶようである。

たのしみはまれに魚にて兎ら皆がうましうましといひて食

ふ時

橘曙覧

〈志濃夫廻舎歌集・五六九・春明艸〉

これは後でワークシヨップで実作するときの基になる歌である。豊かな現代日本からは想像しにくい光景かもしれないが、当時の日本人にとって魚はぜいたくなおかずであり、あくまでも「まれに」食するものであったことが想像される。

くれなるの二尺のびたる薔薇の芽の針やはらかに春雨の降
る 正岡子規

〈竹の里歌〉

「の」を四つ重ねてリズム感を出している。薔薇の芽に焦点を当て、自分の周りの自然を丁寧に詠っている。

われ男の子意気の子名の子つるぎの子詩の子恋の子あ、も
だえの子 与謝野鉄幹

〈紫〉

「ゝの子」というフレーズをリフレインして独特のリズム感を生み出している。明治時代の男子の作という力強さがある。

やはらかに柳あをめる

北上の岸辺目に見ゆ

泣けとごとくに

（一握の砂）

石川啄木

恋等の題材とは違って、緊迫感が漂っている。まさに歴史の証としてドキュメンタリータッチとも呼ぶべき作品となっている。必ずしも平和な牧歌的なものだけが題材になるのではないということを伝えたかった。

世をあげし思想の中にまもり来て今こそ戦争を憎む心よ

近藤芳美

（埃吹く街）

啄木の代表的な故郷を思う歌である。「や」と「き」を二回ずつ繰り返すことでリズム感が出ている。三行に分けて書いている。後のワークシヨップでは、一首を一行に書くことを勧める。この歌を紹介したのは、筆者の高校時代の音楽の授業で平井康三郎がメロディーをつけた作品があることを知り、心動いたからである。実際に歌を歌ってみると、短歌は朗詠するものであり、リズムや音の流れを重視する点でも、音楽との関連性は実に深いことがわかる。謡から発生したというその起源から当然といえば当然であるが、現代歌謡の歌詞のリズムにも通じるところがありそうである。

ころぶして銃抱へたるわが影の黄河の岸の一人の兵の影

宮柁二

（山西省）

第二次世界大戦の終わった年、一九四五年の作である。ずっと今まで心の中にしまってた反戦の思いをやつと吐露できたのかもしれない。戦後の新しい日本に生きて、力強くその思いをぶつけている。やや具体性に欠ける表現ではあるものの、「憎む心よ。」と終わっているところに呼びかけの余韻が残る。そして最後に長い短歌の歴史の原点にまた立ち戻って、恋の歌を一首紹介した。現代にも通じる歌意であり、この歌が書かれた平安の世から脈々と続いて生き残ってきた短歌のリズムの味わい深さを届けたかったので、ゆっくり朗詠した。

忍ぶれど色にいでにけりわが恋はものや思ふと人の問ふま

で

平兼盛

（拾遺集・卷十一・恋一・六二二）

一九四〇年、戦場で作られた歌である。今までの花鳥風月や

「忍ぶ恋」というと日本独特のもののようにも思えるが、キ

ルギスは中央アジアに属し、ロシアの影響を色濃く受けてはいるものの、好きな人になかなかその思いを告白できずに隠しているといった心情は、国や時代を超えて参加者も共感できるものと思われ、多くの参加者はその歌意に納得していた様子であった。

短歌と日本語教育

筆者が短歌を授業の中に取り入れようと思ったのは、日本を離れて海外で日本語教育に携わるようになったことが大きい。日本人の一日本語教師として、海外で学ぶ日本語学習者に伝えるべき日本文化や日本事情といったものは何か、そして自分には何ができるのかを改めて考える機会を得たのは、二〇〇五年の秋、トルコチャナツカレオンセキズマルト大学の日本語学科で予備教育課程のクラス担任になった時である。以前から興味があった短歌についてもっと知りたいと思い、そして短歌の形式というのは、拍感覚を養うのに最適なのではないかと考えたのである。

いわゆる入門期の初期の段階での母語とは音体系が違う日本語での特殊音の拍感覚は難しい。それを楽しく身につけるには、短歌というのは一つのいい材料になるかもしれないと考えるに至った。

ここで、クイズを出して日本人も混じる参加者に、果たして正確な拍の数え方がわかるかどうかを試みる。

クイズとして出題したのは次の三語である。

- ① いっきゅうさん
- ② しょうぼうしょ
- ③ バイナップル

撥音、拗音、長音を含む三語を選んだ。拍を数えるのに表記は関係ないが、そのことを示すためにもあえてカタカナ語も混ぜた。音節ではなく、モーラとして数えなければならぬため、初めて拍を数えるという経験をした参加者には戸惑いも見られたが、最後のワークシヨップで作品を作ってもらうためにはこの拍の数え方は必須である。目で見ただけで数えにくい人は、手で拍子を取ってみるか指を折って声に出して数えてみることを勧めた。答え合わせをした後、特殊音の数え方のルールについての説明を行った。

トルコ、中国、インドネシアの学生、そして鳴門教育大学の留学生たちの短歌紹介と鑑賞

それぞれの国の学生たちの短歌を披露したが、お国柄ともいえるものが表れていて興味深いものがある。表記はすべて学生が提出した時のままである。

【トルコの学生の短歌】

- ・ 寂しさは難しいですまん月とまっていますので朝と帰って
- ・ 夏休みセクシーな人セクシーなふくをきますよできるだけ見て
- ・ 暑くなる恋人に会う花もらううれしくなるよあいはいっぱい

・愛はいいこい人もいい春もいいそれでせかいはすべてがい
いね

・夏休みまっつているでも彼に会うことができないかなしくな
るよ

二〇〇六年の後期、「講読」の授業で『みんなの日本語初級
Ⅱ 初級で読めるトピック25』の第五十課に「紫式部に聞く」
という架空のインタビュー記事が読み物として載っていた。講
読の最後の授業としてふさわしい読み物だと思った。この文章
の中で短歌について触れているわけではないが、『源氏物語』
という作品名が出てくる課で、日本文化の一つとして短歌を取
り上げるにはいい機会だと考えるに至った。ただ短歌という形
式を紹介して終わるだけではなく、学んだ知識をアウトプット
する活動として、短歌の実作を試みることとなった。まず、五・
七・五・七・七の音数の数え方を練習したのち、自分の歌を自由
に創作してもらった。提出された歌の表記として、その時まで
に習得した漢字をできるだけ使おうとしている努力の跡が見ら
れることは評価に値する。例えば「満」という漢字は未習であるため、
と表記するところだろうが、「満」という漢字は未習であるため、
「月」だけ漢字表記にしている。四首目の歌では、「いい」とい
うシンプルな形容詞をリフレインすることで、リズムのいい歌
になっている。リフレインは、短歌の技法としてよく知られる
ところであるが、短歌づくりのスキルとして、それを教えたわ
けではないのに、自ら工夫して詠み込んでいるところに驚いた。
五首目の歌は三十一文字というルールは守っているものの、句

またがりを含む歌になってしまっている。しかし全体的に
三十一音であり、ゼロ初級から学び始めて、たった一年で定型
詩としての整った作品が作れたことは、学生たちの日本語学習
への更なるモチベーションにつながったと信じている。

【中国の学生の短歌】

二〇〇七年の後期、中国の南昌大学外国語学院日本語学科の
クラスでの作品である。二クラスで行ったが、この時は全員
の投票により歌会形式で作品を批評しあった。その中から上位五
首を紹介する。

- ・ 歳月は知らず知らず川みたい海へ流れて剣も切れない
- ・ 卒業はうれしいことかわからない別れの駅で涙をこぼす
- ・ 会った時何よりもよい別れると傷深くつき恋ってこんな：
- ・ 坂道で舞い落ちてくる紅葉と初キスをして快くなる
- ・ 人類は取るにたらない生命は神秘いっぱい矛盾完璧

南昌大学は江西省にある国立大学で、国から重点大学の指定
を受けている。四年間真面目に日本語学習に取り組めば、ほと
んどの学生が日本語能力試験一級に合格する。この作品作りは、
二年生のクラスで実施したものである。若者らしい題材を新鮮
な感覚で詠み込んでいる。表記の上で目を引くのは、三首目
で、・・・という記号表現を使って、余韻を残すためか後に続
く言葉を省略している。現代短歌としては、こういった記号を
使った方法が取られることもある。言葉を省略してしまうこと
の是非は別にして、自分なりの表現方法を工夫しているところ
は評価したい。すでに熟語の語彙が豊富であるがゆえに、漢語

の多用で表現しようとするところに中国人学生の特徴がある。例えば、五首目の歌だが、矛盾完璧という四字熟語で表現するよりももっとやわらかい和語を使った方が歌の調べとしては滑らかになるであろう。しかし漢字の情報量を考えると、学生にはこの言葉以外はしつくりこないのかもしれない。

【鳴門教育大学の留学生の短歌】

二〇一六年鳴門教育大学の日本語補講のクラスで作ったものである。作歌の前に例歌を五首ほど紹介した。このクラスの学習者は、媒介語として英語も可能であり、日本語の語彙力は能力試験四級から三級レベルであったので、必要に応じて、個々の歌の意味説明には、英語を使った。例えば、一首目の観覧車 (Ferris wheel) などである。

・観覧車回れよ回れ思ひ出は君には一日我には一生

栗木京子

・いつかふたりになるためのひとりやがてひとりになるため
のふたり 浅井和代

・たとふれば心はきみに寄りながらわらはは西へでは左様な
ら 紀野恵

・せつなさと寂しさの違い問う君に口づけをせり これはせ
つなさ 田中章義

・唇をよせて言葉を放てもわたしとあなたはわたしとあな
た 阿久津英

この例歌の意味解釈と短歌のルールについての説明の後、学生たちは自分の作品作りに取り組んだ。その結果次のような歌

が出来上がった。

・きれいなつきまどからみえるきれいなつきへやからもみえ
るつきはつきです

・うみのかぜしぜんのおみやげもつてくるあじさいのはなな
るところえんのみち

・めをとじておもいだすためあめのおとこのなかにきみ
はひまわり

・きれいでみるときうれしいたいせつなとくべつなひと
いっしょにすみます

・いかないでさびしくなるよせつなくてどこにいますかとて
もあいたい

・こいびとよゆめにいらつしやいあえなくてこころのうちに
いるこいびとよ

恋の歌だけを例歌として挙げるのはあまり適切ではなかったと反省しているが、学生は、「つき」や「うみのかぜ」や「あめのおと」など自然の機微に触れて感じたことを情緒豊かに詠んでいる。しかも「なるところえん」という身近にある場所を具体的に詠み込んでいる。漢字を一切使わずにひらがな表記にしているのは、まだあまり漢字学習が進んでいない初級レベルであるためだが、かえって柔らかなさが増し、独特の表情を見せている。例歌の二首目、浅井氏もその効果をねらって故意にひらがなだけの歌に仕上げている。

一首目は「つき」のリフレインにより、調べとして独特のものを醸し出している。声に出して読んでみるとそのことがより

鮮明になるはずだ。「つ」音が非常に心地よく感じられる。

トルコや中国の学生たちとの違いは、現在日本に住んでいて、日本の四季に触れ、またそれを愛でる習慣を肌身で感じ取っているであろう点である。五感を鋭くして作品の中に投影させていることが感じられる。

何回か日本語クラスでの短歌導入をしてみても、古語での言い回しのほうがリズムが引き締まると感じたこともある。表記に関しても、日本人で短歌を作っている人たちの中にも現代仮名遣いだけで作る人もいるし、昔からの歴史的仮名遣いを守っている人たちもいる。日本語学習は、助詞としての「は」を「わ」という音に、そして「へ」を「え」という音に読み替えることにはなれているかもしれないが、それ以外にも「ひ」を「い」にまた「ふ」を「う」に「へ」を「え」という音に読み替えることもあるというのは、混乱をきたしてしまう恐れもある。初級のクラスではなかなか短歌導入のために古典文法まで学習する余裕はないのだが、中国の日本語学科では古典文法が科目として設定されていて、筆者も一時期担当したことがある。そのクラスでは百人一首を普通に読みこなせるようになってきたので、日本語学科の上級クラスにおいては、拍感覚を養うという初級クラスの目標以上の深みのある短歌を取り入れた授業も可能であろう。

現代の短歌鑑賞

ワークシヨップの前に、現代仮名遣いのみで書かれた日本の

十代の作品を紹介する。^(準)短歌を作るということは、何も難しいことではなく、身近なところから、心が動いたことを文字にしていって作業であることを感じてほしいと考えたからである。

【文部科学大臣賞】

オレンジのほこりが踊る化学室 二人の酸素がなくなっていく
千葉県立鎌ヶ谷高等学校 大芝 嶺花

【青春の短歌賞 高校生の部】

朝焼けを抱いていました君のことずっと嫌いでいられるように
沖縄県浦添高等学校 浜崎 結花

【青春の短歌賞 中学生の部】

先生が 来る前急いで 黒板を 消した後の 新鮮な跡
早稲田大学高等学院中学部 内田 善也

【大阪府知事賞】

セミの声誰もが気付くその声に気付かずいたあの頃の俺
大阪桐蔭中学校 内藤 開

これらの歌は説明なしに、参加者にストレートに届いた。十代のみずみずしい感性が感じられる秀作である。短歌大会の審査を通じて賞を受賞した作品だけに、描いている世界に広がりがある。読み上げたあとの参加者の反応はそれぞれであったが、思いを吐露する手段として、若い年代にも短歌を愛する人たちがいて、全国各地で大会が開かれ、歌を作ることを楽しんでいる様子は伝わったようである。日本語教師として学習者の前に立つとき、日本文化として伝えたいものは何かと自問自答することがよくある。学習者の日本語学習のきっかけを問うと、ア

ニメや漫画などポップカルチャーに熱い視線が集まっていることが多い中で、今後、伝統文化をどのように次世代に伝えていくか、また時代とともに変化していく興味に対応していくかは、常に念頭に置いておかなければならない課題であろう。

三 ワークショップ概要

あらかじめ西條先生に日本人と現地の先生方とのバランスも考慮して考えられたグループ分けにより、六グループ作った。

課題としたのは、

たのしみはまれに魚にて見ら皆がうましようましといひて食ふ時
橋曙美

という歌から、最初の「たのしみは」と最後の「時」だけを残り、間のことを考えるというものである。

筆者は各グループの間を回ったが、あまり作爲的な手は加えず、質問を受けたことに対してのアドバイスを与える程度にとどめた。今回の作歌の目標は、五七五七七のリズムを整えることを第一義にしたが、なるべくオリジナルの考えを生かしてほしかったので、一字程度の字余りや字足らずは大丈夫だと励ました。

グループの意見をまとめるのは、なかなか大変であろうと推察したが、ファシリテーターとしての役割を果たす人、書記の

役割を果たす人など日本語教師研修でのこういつたワークショップに慣れているのか、各グループでの話し合いは活発に行われた。それぞれのグループの代表歌ができあがった。その歌に番号をつけ、プロジェクター画面に映し出し、参加者に一番いいと思われる歌に一票を投じてもらった。投票結果は次のとおりである。

- ①たのしみは気持ち通じるジェスチャーで二歳の息子がチャイホしいとき…五票
- ②たのしみは子とあそぶときえがおみてわらいをきいていっしょにいるとき…二票
- ③たのしみはきょうしどうしとあうセミナーでいいかいであつまったとき…三票
- ④たのしみはしんゆうとあいおちやのみかれしについてだんわするとき…三票
- ⑤たのしみはこどものえがお「ママ」といわれだきしめてくれしあわせのとき…九票
- ⑥たのしみはいちにちはたらいてはなれていたこどもに会えるとき…一票

「たのしみは」という個人的な話題で始まり、グループで意見をまとめるのは大変な作業であったと推察されるが、各グループ一つだけの代表作ができあがった。結果的に⑤の短歌が多数の支持を得た。時間があれば、そのグループ参加者の作品

の説明してもらい、また投票した参加者の意見を聞きたかったが、残念ながら歌を作るのに時間が取られ、お互いにディスカッションを深めるところまではいかなかった。⑤が、みんなの共感を得た理由を分析してみた。一つ目には「ママ」という具体的に子供が発することはカッコつきで示したこと、そして二つ目には全体の流れとして、「こどものえがお」という名詞で終わる二句目で一呼吸置き、後半に具体的に抱きしめている情景が描かれている点が挙げられる。

ワークショップでは、短歌の五七五七七という音の制約の中で日本語をアウトプットしてひとつの情景を詠み込むのが目的であった。まずはどのグループも無事、形を整えるところまでこぎつけた。中央アジアの一国で熱心に日本語を教える先生方に対して、短歌への関心の種を蒔き、最初の一步を踏み出してもらうことができたのではないかと考えている。

おわりに

ワークショップ後の質疑応答では、一人の参加者から「なぜ短歌の音は、五や七なのか。三や八ではないのか？」という短歌の根本に触れる質問をいただいた。筆者は即座にその問いに対する明確な回答を持っているわけではなかったが、帰国後文献にあたってみると諸説あることがわかる。金田一春彦氏はその著書の中で一つの答えを提示している。「日本語の拍は先に述べたように、点のような存在なので、二拍ずつがひとまとま



ワークショップの様子



大会後の記念撮影

りになる傾向がある。そうすると二拍からなるものが長、一拍からなるものが短と意識され、そういう長と短との組み合わせで詩を作り出そうとするためである^(注5)。」と述べている。また、別宮貞徳氏も著書の中で、短歌形式の成立過程を総括している。「まず大雑把な区構成として短長の安定感が優先し、感情表出にもっともふさわしい全体構造として、短長の二度くりかえしに止めの一句を付け加えた短長短長長の形式ができた。そして各句の音節数については、二音節一拍の原理に従い、さまざま試行錯誤をくりかえしているうちに、生得的なリズムである四拍子に合致するものとして、短い句は五音節、長い句は七音節という標準句を完成した。これがすなわち、五七七七七の短歌形式である。」^(注6)と述べている。しかしこの四拍子説に異を唱える専門家もいて、研究者の間でも意見は異なっている。これらのことに関しては、今後さらに考察を深めていきたいと考えている。

また、もう一人のベテランの現地日本語教師からは、「アジアのほかの国々でも短詩型文学としての定型詩のようなものがあるのか?」という質問もいただいた。この問いに関しても、文学そのものを専門としていない筆者は、日本以外の国々の世界中の短詩型文学に明るいわけではない。わずかにマレーシアには「パントン」と呼ばれる四行詩があることを知っているだけである。今後また違った地域の短詩型文学についても理解を進めたい。世界の国々には数多くの定型詩が存在するはずだが、その音律に焦点を当て、短歌と比較することで、それぞれの言

語の持つ音やリズムと定型の関係が際立ってくるに違いない。質疑応答の時間により、キルギスの方々の伝統的な日本文化や文学に対する関心の深さを実感するとともに、こういった今後の課題を提供していただいたことに感謝したい。また、今回の講演を引き受けるにあたり、背中を押して送り出していたいた元鳴門教育大学特命教授小野由美子先生には改めてお礼を申し上げたい。

最後に、今回の講演の場を設けてくださり、講演以外にもエクスカーションなどを企画してくださったビシケク人文大学東洋国際関係学部日本語日本文学講座の先生方にもお礼を申し上げます。

注

(1) 一九九九年に発足した任意団体で、キルギス(中央アジア地域含む)における外国語として日本語を学習する者に対する日本語教育の充実と促進を図り、日本語・日本文化の普及、キルギスと日本の相互理解を深めることを目的としている。キルギス国内の高等教育機関、初等中等教育機関、そして民間語学学校他の日本語教師やJICA青年海外協力隊ボランティア(日本語教育、青少年活動)等が活動に参加している。二〇一六年四月現在の会員数は約三十名であり、二〇一五年八月には、日本国外務大臣表彰(団体)を受賞している。また、同年に国際交流基金「さくらネットワーク」

にも加人を果たしている。

- (2) 井上宗雄 武田忠一編(一九九九)『新編和歌の解釈と鑑賞事典』井上氏のはしがきより引用。
- (3) 短歌結社「雲珠」編集・発行人。
- (4) 鳥海昭子(二〇〇九)『ラジオ深夜便誕生日の花と短歌 365日』NHKサービスセンター、六五頁。
- (5) 本文の引用は『日本古典文学全集』(一九八二)による。
- (6) 例歌の引用は、俵万智(一九九七)『あなたと読む恋の歌百首』(毎日新聞社)による。
- (7) 産経新聞開発主催 第22回 与謝野晶子短歌文学賞青春の短歌賞受賞作品(二〇一六) ウェブサイト
<https://www.eventscramble.jp/uploads/5c3b46ec97fed476e8710c6fc90dd11.pdf> (二〇一八年七月一日最終閲覧)
- (8) 金田一春彦(一九八八)『日本語新版(上)』岩波書店 二二八頁。
- (9) 別宮貞徳(二〇〇五)『日本語のリズム 四拍子文化論』筑摩書房 八四頁。

【附記】

本研究は、JICA受託事業「ルワンダ国学校ベースの現職教員研修の制度化・質の改善支援プロジェクト」(代表…小野由美子)、JICA受託事業「アフガニスタン国識字教育強化プロジェクト」(代表…小野由美子)の助成を受けたものである。

【参考文献・参考資料】

- 井上宗雄 武田忠一編(一九九九)『新編和歌の解釈と鑑賞事典』笠間書院 大岡信(一九九四)『一九〇〇年前夜後朝譚』近代文芸の豊かさの秘密』岩波書店
- 岡井隆 金子兜太(一九六三)『短詩型文学論』紀伊國屋
- 川本皓嗣(一九九二)『日本詩歌の伝統―七と五の詩学』岩波書店
- 来嶋靖生(二〇〇三)『短歌の技法―韻律・リズム』飯塚書店
- 坂野信彦(一九九六)『七五調の謎をとく―日本語リズム原論』大修館書店
- 馬場あき子(一九九九)『韻律から短歌の本質を問う』岩波書店
- 店
- 牧野昭子・沢田幸子・重川明美・田中よね・水野マリ子(二〇〇二)『みんなの日本語初級II初級で読めるトピック25』
- 水谷信子(二〇〇九)『日本語教育をめぐる研究と実践』凡人社
- 水野昌雄(一九八八)『短歌の作り方』成美堂出版
- ウェブサイト…キルギス日本語教師会オフィシャルサイト(写真提供) <https://jikyoushikai-kyrgyzjindo.com/> (二〇一八年七月一日最終閲覧)
- (ひろた ともこ・本学教員)